

生活支援工学の現状と今後

Current Situation and Future of “Wellbeing Science and Assistive Technology”

○ 諏訪基 (国リハ研) ○ 鎌田実 (東大) ○ 川澄正史 (東京電機大) ○ 藤本浩志 (早大)

井上剛伸 (国リハ研)

Motoi SUWA, The National Rehabilitation Center for Persons with Disabilities

Minoru KAMATA, The University of Tokyo

Masashi KAWASUMI, Tokyo Denki University

Hiroshi Fujimoto, Waseda University

Takenobu INOUE, The National Rehabilitation Center for Persons with Disabilities

Abstract: “Wellbeing science and assistive technology” has become gradually known for the last decade. This research field has evolved from “Rehabilitation Engineering” and “Welfare Engineering”. It focuses on wellbeing of all of the humans, and improves dignity, human relationship and quality of life through integrating medicine, engineering, sociology, psychology and other human related academic fields and social actions. Although this field is very important, it is very difficult to improve it because of such a broader concept. In this organized session, we will discuss the current situation and the future of this field. There are four speakers who will talk about different areas as the discussion topics; the missions of this field, the social resources, the human resources and the future visions of this field. We expect a vigorous discussion on these matters.

Key Words: Wellbeing Science, Social resources, Human resources, Future vision

1. はじめに

生活支援工学は、それまでのリハビリテーション工学や、福祉工学の概念を発展させた、ここ 10 年の新しい学問領域である¹⁾。このような新たな学問領域創設の背景には、1997 年に施行された福祉用具法や、2000 年の介護保険の開始、2001 年に WHO から発行された国際生活機能分類 (ICF)²⁾による障害の概念の転換など、福祉と工学の領域における大きな変化が影響している。

2000 年に発足した日本生活支援工学会の会則³⁾には、その目的として下記のような記載がなされている。

“本会は、高齢化、高度技術化など急激に変貌しつつある社会環境において、個人の尊厳、人間関係、生活の質などの観点から、すべての人の幸せなることを願い、医学、工学、社会福祉、心理学など生活に関連する学術・社会活動についての知見を広く結集し、連携と総合化によって、学術の進展と社会への貢献を図ることを目的とする。”

生活支援工学とは、多くの学問領域を包含し、ただ単に学問領域として成り立つのみではなく、社会活動をも含んだ概念をもつことが記されている。そして、“すべての人の幸せなることを願う”、なんとも広い概念で形成されているのである。世の中で真に必要とされる研究領域であるにもかかわらず、その広い概念であるが故に実現が難しい。

本オーガナイズド・セッションでは、日本生活支援工学会の創設 10 周年を機に行われたビジョン検討会の議論をふまえて、生活支援工学の現状と今後について議論することとする。話題提供者下記の名 4 名である。

諏訪基 (国リハ研究所 顧問)

“生活支援工学 将来ビジョン”

鎌田実 (東京大学高齢社会総合研究機構 機構長)

“生活支援工学 10 年の歩みと今後の展望”

川澄正史 (東京電機大学未来科学部 教授)

“生活支援工学 社会に根ざした今後の取り組み”

藤本浩志 (早稲田大学人間科学学術院 教授)

“生活支援工学 これからの実学を支える人材”

話題提供をふまえて、それぞれの話題について、フロアを交えた議論を行うこととする。

2. 生活支援工学の将来ビジョン

生活支援工学会の将来ビジョンの検討では、生活支援工学会発足の趣旨に立ち返り、その後の社会情勢の変化を加味しつつ、今後 10 年間を見据えた生活支援工学の将来ビジョンを提言することを目指し活動を行っている。将来ビジョン検討にあたり、以下の 3 つのタスクフォースを立ち上げ、議論を行った。

- 1) これまでの生活支援工学の歩みと今後の展望について
- 2) 生活支援工学に関する事業と財政基盤について
- 3) これからの実学としての生活支援工学を支える人材について

将来ビジョンについては、現在も議論を重ねている段階であるが、進むべき方向性を定めるとともに、そのための具体的な取り組みや、人材育成などを総合してビジョンを構築する必要性が指摘され、それに向けたとりまとめを行っている。

3. これまでの歩みと今後の展望

タスクフォースでは、学会設立時、設立後の 10 年、今後と、時期を分けて会員に対するヒアリングを行った。その結果、関連する学問領域間の連携や学問体系の構築、生活支援工学の資質の検討など、連携と総合化に対する取り組みが行われていることを改めて抽出した。これらの結果をふまえて、今後の展開としては、工学の枠組みを超えて、他の学問領域とのさらなる連携、総合化を進めるとともに、社会とのつながりをより強化し、実学としての生活支援科学としての発展を提言としてまとめるに至った。概念図を図 1 に示す。

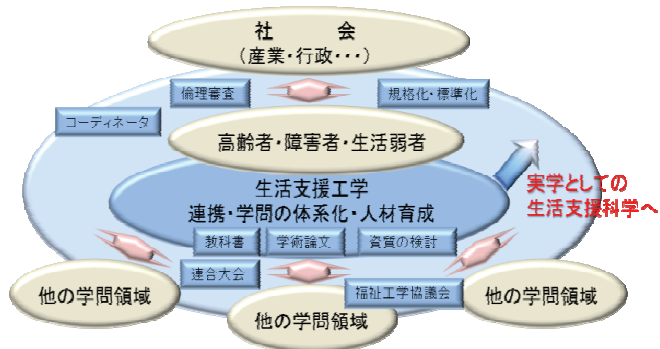


図1 生活支援工学の今後の展開

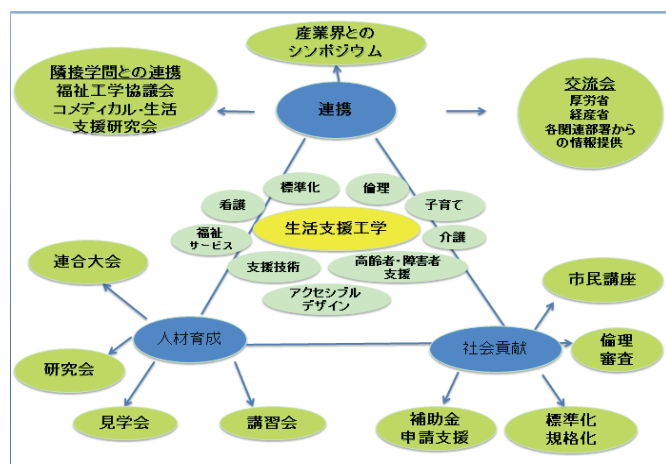


図2 人材の強化とそのための取り組み

4. 社会に根ざした今後の取り組み

タスクフォースでは、学会の財政や運営基盤に関する検討を行うとともに、今後生活支援工学分野で必要な事業や取り組みについて検討を行った。

その結果、社会のニーズを的確に捉えた当該分野の取り組みを行う必要性を指摘した。具体的には、福祉機器の臨床評価の強化や規格化・標準化の取り組み、若手研究者や学生を対象としたアイデア創出のための取り組み、これまでに蓄積された生活支援工学に関するセミナー等による知識共有などが提案された。

5. 実学を支える人材

タスクフォースでは、学会の会員構成やその変遷について調査を行うとともに、今後の生活支援工学を支える人材について議論を行った。その結果、若手研究者やコメディカル、介護の専門職等の分野の人材をさらに強化する必要性が指摘された。これらの強化策には、社会を巻き込んだ取り組みが必要であり、それらを整理した結果として、図2に示す内容が提案された。

6. おわりに

生活支援工学はまだ未成熟期の学問領域であるとともに、その範囲は非常に広いために、体系の確立にはまだまだ時間がかかる分野である。しかし、次の10年を見据えて、何をすべきか、それをどのようにすべきかを関係するすべてに人が共有することには、大きな意義がある。また、それを決めるための議論を、関係するすべての人で行うこ

とも、価値のあることかもしれない。このOSでは、以上に示した3つの視点にこだわらず、いろいろな視点から生活支援工学の将来について議論し、この10年タームでのビジョン構築に向け、何らかの提言に結びつく知見を得ることを期待している。そのためにも、多くの方の参加をお願いしたい。

参考文献

- (1) 林豊彦, 資質委員会の活動について, 生活支援工学会誌, vol. 1, no. 1, pp. 10-15, 2002.
- (2) International Classification of Functioning, Disability and Health, WHO, 2001.
- (3) 日本生活支援工学会会則, <http://www.jswsat.org/kaisoku.html>, 2000.